

保健体育指導者として

荒 井 鉄 男

成城四十余年の退任にあたり、このように記念号を企てて下さいましたことと、また、投稿の機会を与えられましたことに先ずは謝意を表すものであります。

本来なら学術論文を投稿すべきところではありますが、退任に免じてお許しを願い、とても筆に尽くせぬ四十余年の一端を述べさせていただき―自分史を述べることでいささか面映ゆい限りではありますが、謝意に代えさせていただきたいと思えます。

私の成城四十余年は昭和二十九年四月から、故三橋義雄成城大学教授より要請を受け奉職することになり、助手としてスタートしました。

三橋先生は中央大学教授でもあられまして、多分文部省への認可の資格者か何かの関係であったろうかと思われませんが今日ではとても考えられないことであります。先生はさらに日本体操協会副会長職にあり、日本人体位向上身体教育に、健康増進、ラジオ体操の普及等に貢献されておられました。

保健体育指導者として

保健体育指導者として

先生には厳しく保健体育の授業に対する熱意ある指導を受けました。体育実技（徒手体操、器械体操）などの他に精神面での教訓も受け指導者としての技量の猛練習をいたしました。

先生は学園と隣接された川向うのご自宅より早い出勤なので、その前に体育館の玄関からはじまり教官室、階段などの掃除、モップかけワックスかけ、電熱器での湯沸かし、お茶入れをこなし、それから徒手体操、跳び箱、マット運動、バスケットボールなどの練習を授業前約一時間半にわたり一汗も二汗もかき、その後で教官室において正しい指導法などの講義が毎日行なわれました。私の前任の方はこのような早朝の指導に耐えられず辞職されたとの話も窺いました。この指導に勝つには並大抵の努力ではなかった様に感じております。

私は小学校低学年の頃より結構仲間内では器用であったことも幸いし、跳び箱の空転や回轉、マット運動が出たので大して苦にもならなかったし、先生との交流の楽しさが今では懐かしく思い出の中で強く印象に残っております。後に赴任された故両角、恩田の両先生に対しては、三橋先生の求める指導者の技量にいささかの物足りなさを、再々、もつと練習をしなければと、コゴトを申されておりました。

あの頃は、三橋先生をはじめ中央大学の体育指導者とのバスケットボールの試合、跳び箱、マット運動など、学生への指導法の研究会など再々の交流を重ねたものです。会の終了後は先生のご自宅で美酒をかわし、お互いの研磨に励んだものです。

私がアキレス腱を切断した時も、昭和四十六、七年の頃であります。跳び箱の授業中の出来事であり、学生に模範演技を見せるのも自信がありましたので一番見事な演技を見せたのに拍手が少ないので、立派な演技をしたのに「拍手が少ない」と学生に要求、遅れ馳せながらの大拍手に應えてそれはそれは気合いの入った踏み切っ

たところ、空中で脚の脹脛のあたりを跳び箱の角にでもぶつけたような衝撃を感じて着地。すぐアキレス腱切断とわかり国立大蔵病院へと移送されました。あの時の勢いある踏み切りが出来たことの誇らしさと元気潑刺、フアイト満々の気力あったからこそ切断したのだと自慢に思い、入院生活も楽しく思われました。もっとも、入院も一週間で無理矢理退院してしまい、二ヵ月後のスキー学校指導に参加したものです。

それまで、長い間のラグビー選手生活の中にも大きい怪我もなく入院生活をすることもなく過ごしたのですが、その時は、自分にアキレス腱切断の手術の痛みもなく（勿論、麻酔のおかげで）、最後の二針の処置の部分で麻酔が切れ、"やめてくれ"と大声を出す程、痛烈な痛みを感じたことを思い出します。若いころよりお酒が大好きで毎日の晩酌を欠かすことなく深酒、泥酔も度々のことを思えば、麻酔の切れの早かったことは身から出たサビと思っております。

四大学運動競技大会及び主任制度のこと

三橋先生ご退職のあとを、四大学運動競技大会の成城大学の体育代表として体連顧問を引継いで十数年も経た頃でしょうか、故大山学長より主任にした覚えがないとの深夜自宅に電話があり、太平洋から大西洋に蹴飛ばされたかの思いが忘れられません。四大学運動競技大会は学生達が主体性を持って競技会であると心得ております。大学側の全面的の協力のもとで行なわれている競技会ですが、大会学生役員達は私を主任として当り前のことと心得て、私もその学生達とともに頑張っていましたのに。勿論、当時体育主任という制度はなく、その大会時にだけ便宜上用いていたことなのですが、大学の各主任制度の設置はじめの時期で神経質になっていたこと

保健体育指導者として

もあったのでしよう。本学の保健体育の教員の中で一番年長者の仕事と思い対処しておりました。

本学の学生運動競技（四大学大会も含み）に対する理解がなく、当初は学生の競技大会参加に対する授業欠席も認められず、後に公欠と云う用語が生まれました。

四大学競技大会に対する大学側の考えが低く理解が少なかったため、現在までの歴史の中で唯一回だけの優勝、万年三位の順位に甘んじ、それすらも危ぶまれる現状は淋しいことである。

さて、三十年にも及ぶ体連顧問在任中に特筆すべき、驚かされた出来事の一つはヨット部の遭難事件であり、もう一つは山岳部の遭難転落死事件でした。

ヨット部の遭難は全員無事生還しましたが、日付は定かではありませんが昭和三十九年頃、ある夜私の家にNHK放送局より連絡があり、成城大学のヨット部の遭難していることをご存知でしょうかとの問い合わせでこの事故を知り、あわてて当時の学生部長の故斎藤 正先生へただちに連絡、先生のご指示で湘南の葉山に対策本部を設置、直ちに私も出向き、心配のあまり海岸沿いを学生有志と一緒に見廻りました。と云うのもヨット部の合宿届けも不十分な状態であったし、部員の家の別荘を使用しての合宿を行っていたのですが、予定の時間になっても目的地に着かず予定の時間に帰艇されない時点であわてて警察に知らせたものです。その遭難者の中に時の政界の実力者、河野一郎氏の秘書の子息がおり、氏のひと声で海上自衛隊、航空自衛隊との捜索が開始され、三浦半島漁業組合など大掛りな捜索が行なわれました。海上、航空両自衛隊でのあらゆる気象状況を加味しての捜索がなされたにも拘らず発見されませんでした。次々といろいろな情報が入る中、神戸港へ鋼材輸送途中

の商船に伊豆大島南方海上にて全員無事救助されたとの一報が入り安堵しました。このような遭難事故で全員無事であったことは、稀にみる幸運な出来事でありました。

国外に脱出の意志があるなしに拘らず、身柄を警察に取り調べを受けてから釈放され上陸が許可されるという事でした。救助された横須賀の海上自衛隊本部からNHKテレビの全国放送中継でインタビューを受け全員無事救助に対する感謝の意を表し、各関係者に大学代表者として挨拶まわりをいたしました。後日談で、一升瓶一つ二つでお礼を済ましちゃったのは荒井ならではなどとよく云われたものですが、学校から鋼材運搬の商船会社へ感謝状をお贈りしてお礼をいたしました。

山岳部遭難死事件は昭和四十四年十一月冬山偵察山行で、剣岳池ノ谷左俣で滑落事故死された故沢野益夫君のことです。

故中村英雄学生部長先生の指示で体連総務の学生と共に大学と現地との連絡場所として馬場島ばんばしま小屋まで行き、学校との連絡を密にしておりました。滑落現場近くまで足を運び、大きな岩石が川の橋を無残に破壊し、鉄砲水で流れた巨大な岩石など目の当りにして自然の恐ろしさを痛感したものです。

故沢野君の立派なアルピニストとしての、きびしい山での宿命を今をもって心より悼むものです。

その後そのようないたましい出来事を礎に、山岳部がジャヌー峰征服の快挙を成し遂げたことは皆様ご承知のことと存じます。

保健体育指導者として

数々の顧問

社交ダンス舞踏研究会の部長顧問として、第一回発会式が杉並公民館で開催され女子学生よりダンスのお相手として申し込まれ、当時の私としてはダンスを踊るといふことすら苦手としていたものですから、大変恥をかいた思いがあります。健全な部活動に発展するよう訓示した思いが強くなります。

バドミントン部顧問としては昭和三十三年、四年と記憶する

毎年、長野県武石村に女子バドミントン部員と共に引率参加、地元中学校体育館で蒸し風呂のような暑さの中の夏合宿が思い出されます。合宿終了後は美ヶ原高原へのハイキングがまた一つの楽しみで印象深いものであります。

硬式野球部顧問

昭和三十七年、硬式野球部顧問を引き受け、試合の応援などに出掛けたものです。

大学野球部を語るには忘れてはならないこととして、今では思いも及ばないことですが、硬式野球部に準硬式野球部をという統合問題が起こりまして、双方のOB同志の再三の会議を経て硬式野球部として統合されスタートする運びとなりました。私には、硬式野球部部員は他高校出身者が多く、準硬式部員は学園高校出身者が多くを有していることが統合に関しての難問題の一大原因であることがわかりました。双方のOB連が歩み寄り寛大な成城の仲間精神を持ち、ヤレヤレの野球部統合の運びとなりました。

もう一つ忘れられない思い出として、当時東海大学総長の松前学長の肝煎りで東京都内教育系大学の参加と東

都大学野球連盟に加盟している大学に対して新しい連盟結成に当り参加要請を受け、東海大学の故谷村野球部長先生と幾多の会合後、昭和四十年東都大学野球連盟を円満脱退し首都大学野球連盟に成城大学も加入、神宮第二球場を使用するのリーグ戦がスタートし現在に至っております。加盟後すぐのリーグ戦に於いて成城大学野球部は、最優秀投手賞、最優秀打撃賞を受賞し、輝かしい活躍であったことを明記しておきたい。その後、六大学を凌いで全日本チャンピオンは首都大学から出ていることは周知のことと思います。

ゴルフ部のこと

ゴルフ部との出会いは、ある一人の学生、故中村雅一君との出会いから始まったと申しても過言ではありません。と申しますのも昭和三十七年頃だったとおもいますが、彼等は前部長伊達先生が退職された後任選中であり、私は当時ラグビー部の激しい練習を指導し強力なチーム作りに励んでおりました頃で、ゴルフ部も先生の指導で鍛えて欲しいと懇願され部長を引き受けました。

当初、ゴルフという競技の知識が浅くいきなり女子部の合宿に同行、鬼怒川カントリークラブにて初ラウンドと相成り、珍プレーの数々は今をもって私の宝物の様な思い出の一つです。

以来、男、女ゴルフ部における春秋の合宿には常時同行、リーグ戦の応援など数々のひきこもごもとした思い出と共にあり、長いお付き合いとなっております。

私がゴルフというものに出会った幸せに感謝し、ゴルフの歩みの中で一番大事な故中村雅一君が若くして他界されたことは非常に残念、無念と今もって淋しい出来事の第一と心得る次第です。彼との出会い以来、大勢の学生と接して楽しい出会いを重ね、今日に至っております。

保健体育指導者として

関東学生ゴルフ選手権大会も当初、慶応大、早稲田大、学習院大、立教大、明治大、成蹊大、成城大ぐらいの学校の集まりが学生リーグをスタートしたと思われれます。その後、数多くの大学の加盟がありAブロック、Bブロックが形成されました。現在の様な数多くの大学数のゴルフ部が創部、加盟されることは想像も出来ませんでした。

女子学生ゴルフ選手権大会に於いては、定かではありませんが一九七三年から七七年にかけてだと思えますが、華の九連覇（リーグ戦は春秋二回）を成し成城大学に向うところ敵なしの素晴らしい黄金時代がありました。私も朝から晩まで彼女等と「成城ゴルフ」の部専用の練習場で練習したのも度々のことでありました。部長成りたての当初は、学生の身分でゴルフなぞ、という贅沢なお遊びとされた感覚でとらえられ一般のゴルフアは勿論のこと、ゴルフ場側にも若いゴルフアの育成に理解がなく合宿などには大変苦労いたしました。本学はゴルフ学生の父兄の理解あるご援助もあって、またゴルフ部活動のスタートが早期であったことが幸いして長いこと活躍したものです。

部活の経済的援助に関しては、元学園長、理事長妹尾一三氏の暖かいご理解とご援助を賜った事を有り難く感謝するものであります。成城大学ゴルフ部の歴史にこのご理解が大きな力となりましたことを大書しておかねばならぬこととおもいます。

ゴルフに関して特に記しておきたい第一は、学園創立七十周年記念事業の一環として完成をみた伊勢原グラウンドで、大学体育の授業として学生のために価値ある授業を開講することを提案し、敢行出来たことであります。あの広いグラウンドで廉価な予算の中で、若干の道具を揃えてのスタートでした。

ゴルフというスポーツは面白いもので止まっているボールを打つだけのごく簡単な運動のようにみえますが、奥が深く長い年月の訓練も必要とするものです。人にも依りますが毎日反復練習しても上達せず、多くの人はそれに一年、二年程の訓練を必要とするスポーツです。止まっているボールを思う場所、距離を正確に打つ技術は見るからに簡単そのものにみえるのが一般大衆に受ける唯一のスポーツなのだと思います。ナイスがありミスが多いスポーツなので、自分一人で楽しめる唯一のスポーツと思います。練習の成果を友達にお見せ出来て、その結果に一喜一憂する誠に楽しいスポーツです。年齢を問う事無く高齢でも大いに楽しめるスポーツである。

ラグビー部部长として三十七年間

昭和二十九年成城大学に奉職以来、ラグビー部とのお付き合いが始まり、平成十年にラグビー部は創部七十周年を迎える事に成るのですが、その間私が四十年程を学生と共に過ごさせて頂きました。

当初ラグビー部とは名ばかりで戦うと相手に負け、勝つ事の知らないチームでした。そのチームを関東地区で優勝させ、全国地区大学対抗ラグビー選手権大会の出場権を得させ、三回目の関東代表で昭和四十二年正月に見事全国優勝を果たすことが出来ました。

初めて名古屋での全国大会に出場した時、第一回戦の九州地区の西南学院大との対戦は開会式直後の第一戦でありました。戦闘意識に欠け負け試合となってしまった。その原因をと考えるに、大きなこの全国大会初出場での遠征ということで宿泊先の食事も生卵すらほとんど食べられないような我儘で偏食の学生達であったこととして、あきれ果ててこの状態では試合に勝つことなど思いも寄らないと知り、反省し、次の春合宿でOBの方の紹介を得て千葉、松戸の自衛隊に部員全員が体験入隊して一週間食事訓練の合宿と思い頑張ろうとしましたが、自



全国優勝胴上げ

衛隊側としては大学生の体験入隊とあって上級隊員扱いの食事を準備され、私が思ったよりはるかによい食事を用意されてしまい、当初の目論みは失敗に終わりました。しかし良い経験を得て、自衛隊ラグビー部との合同練習は思いのほか大きな成果を得たことになり、後の全国優勝に役立ったと思われます。

昭和四十一年秋、全国地区大学戦地区予選に向けて第二グラウンドでの充実した練習の毎日を過ごしました。秋の短い陽に“焚火”をしながら猛練習を重ね、優勝を確信して名古屋に向いたものです。負けると云う弱い面は見当たらないと固く信じて戦い得られたことを、今以て楽しい思いをしたものであります。

昭和四十二年、全国地区対抗大学ラグビー選手権優勝をみやげにして栄えある関東対抗戦グループに加盟を認められました。対抗戦グループには強豪の早稲田大、明治大などあり、それらのチームとの試合に肩を並べて臨むべくシーズン中の長期合宿を敢行しました。試合当日



保健体育指導者として

と翌日は帰宅させて、哲士寮より通学する二ヶ月間の合宿生活を良く頑張ったと思います。その間、ある父兄から私に問い合わせの電話があり、「うちの息子は何処に行った」と尋ねられ、「普段より授業に出席していません、ラグビーの練習にも頑張っています」と、父子の会話の少ない部員のエピソードもありました。その成果として明治大との試合には前半リードし後半に逆転負けをしたものの、東京教育大（現筑波大）に勝ち、青学大にも勝利を収め、成城大学ラグビー部もどうか一人前に成長した気がしたものです。四大学の成蹊大には長年いつもいじめられていたのですが、特に近年は負けることが出来ないほどになり喜ばしいことはありません。何年も勝ち続けると学生も勝つのが当たり前となり、人が変わったように見違える様な成城ラガーに成長いたしました。立教大学にも長年勝つことが出来なかったのに、一度勝ち覚えると相手の方が負けてくれる錯覚を感じます。立教には失礼カナ！でもそれくらい云いたいほど苦

戦の負け回数、苦しさを思うと、男の子は寒さに負けず暑さに負けず、風にも己れにも負けず、良い相手チームを求めて戦いあるのみ、がラガーなのです。

今日の成城ラグビーの輝かしい戦績は、京都大学ラグビー部との定期戦のお陰とも思います。ラグビー部OBの方々のご尽力で定期戦が生まれ、当初は力不足で勝利に導くこともなく負けることばかりが多かったのですが、昨今は伊勢原グラウンドに京都大ラグビー部をお迎え出来るほどに戦力が充実してきて勝利を保っております。

平成七年の定期戦は伊勢原グラウンドで行なわれ、四、五十点の大差をもって勝利をおさめることもできました。本年は京都に赴き、一点差の勝利は帰途の新幹線の中でただただ来年度へにむけての反省の一途でした。

ラグビーはスポーツの中でも一番多人数で戦う競技なので、部員全員の総合力の如何が想像以上のものを現し、それがまた楽しみなのであります。先天性の体質素質、後天性の性格により人は構成されているのですが、トレーニングにより技術向上が尚一層体質を良くし、良い性格の育成をしながら最高のラグビーチームを作り上げるのに至上の喜びを求めての毎日でした。

体育館の焼失

悲しいと云うか、残念と云うか誠になさけないことが二十数年前のこと。毎日研ぎ、掃除し愛着のあった体育館が一瞬にして全焼してしまった事です。放火事件として取り調べが進むなか、犯罪のうちでも放火は非常に罪が重く殺人罪と等しいものであることを警察の方に伺い、放火専門の刑事の話の一つとして放火犯の中には病的に蓄膿症の持病を持つものが多いということで、学園の全学生、生徒のこの様な病気を持つ者がいかチェックもされ調べられたことには驚かされました。

刑事の聞き込み捜査にはたびたび自宅まで来られ、昼食を一緒にしながら色々学校のことや世間話をするなどすっかり刑事と仲良くなったものです。会話の訛りから私の同郷の函館出身の方とわかり、この事件が解決したら打ち上げに一杯やろうナンテ云う程までの話し合ひまでしてしまいましたのですが、今まだ解決もつかず今日まで来てしまっておりませう。大学の体育館が焼けて一週間後には高校の体育館も放火焼失した事で、ただ驚くばかりでした。新聞で知った地方の知人、友人から、成城は体育館二つも焼いて宣伝するなんてさすがだななどとひやかされましたが、何の因果か体育館が二つも火事に見舞われたのが、未だに放火犯も検挙することが出来ず今日に至っております。

学園体育祭のこと

学園体育祭は三橋先生在職の時より伝統的な本学園ならではの総合体育祭であって、私は長年にわたり実行委員長を努めて参りました。大学から幼稚園迄の全体の体育祭なので無理な点の数多くを克服し、各学校の協力を得て続けられていたのですが、体育教師の一部の非協力者、学校教職員の反対者のため中止されたことをここに明記しておきます。また、私の退職後の現在、学園八十周年記念行事の一貫として学園体育祭を企画されていることのように、その非協力者の先生の態度に注目致したいと思えます。

成城学園ならではの全体の和気あいあいでの日本全国に誇れる体育祭を目指した、各学校の先生方の協力的な準備会議の日々、当日の天候が運営上非常に大事なことなので大変気をもんで、早朝暗い中に役員の先生方が集まり実行の決定を決めるのにあやしい天候の時ほど決定に苦慮したこと、無事終了した後は当番校での慰労会の楽しみ、それらはその年どしの楽しかった事の思い出として強く残っております。また翌日の代休を利用して

保健体育指導者として

の、妹尾元理事長を囲んでの全学園ゴルフ交友会は楽しく忘れることのない思い出です。

スポーツ種目の多くはその技術向上が第一義で、身体が故障してもスポーツ障害として止むを得ないことと片付けられます。それは競技であるからです。体操はその点自分自身の身体の運動範囲の向上、柔軟性とか筋力の増強が目的で、健康教育、そのものであると改めて知り得ました。

私は長らく学生時代をラグビー選手として過ごし、その中で身体のケガや故障を克服して勝利に固守し勝利こそが第一義でした。

オリンピック選手へのドーピングなどの違反を犯してまでの勝利をつかむその行為も解るような気もしますが、絶対許すことの出来ないものと思います。人間性の問題と考えます。

スポーツは勝つことが至上主義ではなく、そのスポーツを愛し楽しむことが第一義であると固く信じておりません。

スポーツは勝つ為のものではなく、自分自身の健康増強、何ものにも負けない精神力増強にあるものと信じます。

私の体育教師の四十余年の歩みの中で思うに、人間はスポーツを選択するにあたって自分に適した運動種目を選ぶに、身体的な面を考えて決定するのではなく、性格的な面も考慮して選択することがいちばんの望ましいことである。人間形成は体型と素質、そして内なる性格がその人となりを育成するものと思われま

す。教育は、体育は、運動、スポーツを媒介として人格の陶冶を図るものと心得ます。